# 長作文叙述力の育成と新聞活動

## ――昭和四〇年代の平野彧実践の方法と意義――

田中宏幸

## 一　はじめに

年度初めには二〇〇字程度の文章を書くことさえ四苦八苦していた児童（小学校五年生）が、一年後には原稿用紙七〇枚も書き上げるようになった。さらに、全国作文コンクールにおいて五年連続入賞を果たし、昭和四六～四七（一九七一～一九七二）年には二年連続で日本一を受賞した。今日の「書くこと」の指導状況からは想像を超えた出来事のように思えるが、昭和四〇年代には、この奇跡のような指導成果をあげた教師がいた。栃木県の小学校教諭、平野彧（いく）である。

いったいどうすれば、子どもたちがこのように質量ともに抜きんでた文章が書けるようになるのであろうか。本稿では、これまでの拙論[1]を踏まえながら、「新聞活動」や「調査」を軸として長作文叙述力を伸ばしていった平野の作文指導の内実に迫りたい。

## 二　平野彧の経歴と作文指導の特徴

平野彧（一九二九―二〇〇七）は、栃木県宇都宮市立平石南小学校在職中に、小西健二郎『学級革命』（牧書店、一九五五）と出会い、それを契機として、作文指導を学級づくりに生かす実践に取り組み始めた。作品集的な文集ではなく、学級で生起する問題について討論を行ったり、算数や社会の問題を取り上げたり、文章推敲の仕方を具体的に例示したりして、学習活動や児童の相互理解に生かせる学級文集である。当時の文集「青い風」は、日本作文の会主催「第八回全国文集コンクール」（一九五九）に入選[2]するに至った。とはいえ、このときの平野の指導は、あくまでも学級づくりに重点が置かれたものであった。

平野が作文指導に本腰を入れたのは、昭和三四（一九五九）年に栃木県下都賀（しもつが）郡藤岡町立赤麻（あかま）小学校に転勤してからである。荒れた学級を立て直すために学級文集「くろんぼ」[3]を発行するとともに、児童の作文力を改善するために、緻密な年間計画[4]に基づいた日記

指導を展開した。この日記指導は、一週間ごとに、取材・構想・記述・推敲のいずれかに重点を置き、ねらいを明確にした課題を与えて書かせるものである。「会話で書く」、「書き出しをくふうして書く」、「かじょうがきで書く」、「漢字をできるだけ使って書く」、「中心点をくわしく書く」、「事実と感想をくべつして書く」、「図や表を入れながら夏休みの計画について考えて書く」、「引用、引例を用いて書く」、「『ひゆ』をいれて書く」、「創作文を書く」など三八種の具体的な条件を示し、表現技能の向上を図った。

また平野[5]は、子供たちが喜んですぐ書きたくなるように、作文題材の開発に力をそそいだ。「五十円工作の案内（五十円以内で制作した工作の説明文）」、「授業参観に来てください（友達の親に、友達の活躍ぶりを紹介する手紙文）」、「本の帯、しおり作り（広告文）」、「郷土の人物と郷土めぐり（調べる作文）」、「実生活をもとにしたつづき話（想像による作文）」、「結びの文に合わせて（結びの文を指定し、それに合わせて筋立てを考える描写文）」、「絵地図によるお話つくり（空想作文）」、「ぼくの紙上実況放送（報告文）」、「話題の人、○○さんをたずねて（架空のインタビュー作文）」など、場の設定、取材・選材の着眼、文体の選択などに工夫を凝らし、表現能力の段階も考慮した課題を提示することによって、豊かな描写や筋道だった説明ができるように育てていった。

さらに平野[6]は、子供たちの感性を磨き、真実の叫びを表現させるために、詩づくり活動に力をそそいだ。詩づくりをさせるに当たっては、「小さな喜びに気づく目」を育てるとともに、「詩の構成モデルを活用した作詩法」を取り入れることで、詩に対する抵抗感を軽減した。そして、詩の概念が定着した後は、多彩な表現様式や表現技法に出会わせて表現力を磨くとともに、日記・文集・新聞・掲示などによって詩づくり活動を日常化していった。

こうした基礎的な指導の積み重ねが冒頭に述べたような成果となったのであるが、これだけでは長作文を叙述できるようにはならない。ここにはもう一つ別の工夫が必要となる。

以下、一九六八年度末に学級全員が原稿用紙七〇枚以上が書けるようになった作文課題と、一九七一年・七二年に日本一を受賞した作文を中心に、さらに指導の具体を見ていくことにしよう。

## 三　長期休暇を利用しての長作文指導

### （1）夏休みの指導

授業の中で作文を書く。毎日の生活の中で日記や詩を書く。その結果として文集がつくられる。このような活動を展開することによって、新学期から四か月の間に、書くことへの抵抗がなくなり、子どもたちはむしろ部厚い日記集や個人詩集を何冊も作り出すことに喜びを感じるようになる。この気持ちをさらに高めるために、平野は長期休暇に長作文に挑戦させることにした。

平野が計画したのは、毎日の家庭学習も日記も研究物もすべてザラ紙に書かせ、それぞれを各教科別のページとして整理した「集録」を作らせるということであった。また、研究調査を書くことを推奨し、理科・社会科研究作品展にも積極的に出品していった。このときに児童が取り組んだ調査[7]は、「藤岡町のかんたく」「赤麻地区

のみょう字調べ」「ヨシズあみの歴史」「すげかさづくりのあゆみ」など、いずれも二〇枚を超す努力作としてまとめられていった。

さらに、こうした調査記録とは別に、郷土の昔話を調べることから発展して、全国各地の民話や伝説と比較検討して考察を加えるように導いたものもある。最初の構成メモでは、祖父から聞いた話を筋の経過に従って書いているだけであったが、「似たお話は全国各地にどのくらいあるのだろうか」「キツネはいつも人をだます悪者として描かれているだろうか」という疑問を持つようになり、資料を調べては自分なりの解決を出すという学習に発展していった。題名も「おじいさんから聞いた話」から「赤麻キツネばなし」と改められ、研究記録としての質も向上していった。

こうしてまとめられた調査研究とは別に、夏休みの家庭学習の記録は平均八〇枚ほどにまとめられ、どの児童も「おれもまんざらではないぞ」という自信を獲得するに至ったのである。

### (2) 春休みの指導

年度末の休暇は、夏休み・冬休みと異なり、実質的な指導は何もできない。そこで、「子どもの興味に即したもので、楽しみながら学習のまとめをし、さらに発展的な学習にもなるもの」に取り組ませる必要がある。そこで、平野が計画したのは、「空想による旅行記」であった。「社会科で学習した日本の工業、農業、交通等の知識をもとに、想像による旅行記」（旅行日記）を書かせるのである。事前に、経費・旅行の目的・コースの設定、必要となる資料や図表の収集など、綿密な準備したうえで、記述の負担の軽減を図るために、「日記」を書くこととかみ合わせ、毎日根気強く書くように仕向けていった。

こうすることで、文種も、風景描写も交えた紀行文風のもの、資料からの引用引例による報告文風のもの、旅先からの手紙、地元の方からの聞き書き風のものなど、多彩な書き方を学ぶこととなる。特に「資料や図表の使い方」を工夫して書くことに効果的であった。一人一人が個別の内容を持つことができ、春休みの日々を活用しながらじっくりと取り組むことができるので、作文の苦手な子であっても達成感の得られる課題設定となっていた。かくて、平均七〇枚の大作ができあがったのである。

## 四　日本一を受賞した「わたしのライバル」

### (1) 作品「わたしのライバル」

「第二十一回読売新聞社・全国小中学校つづり方コンクール」（一九七一年）において文部大臣賞を受賞した作文「わたしのライバル」[8]は、当時小学校五年生であった女子（亀田佳子）が、当初は転校生の男子とライバルとして競い合っていたが、やがて協力して田中正造や谷中村の研究調査を進めるようになるまでの、約半年間のできごとや思いを綴ったものである。学級がまとまるまでには、きれいごとでは済まされない様々な事件が生起するものであるが、その学級の姿を的確に捉えて、生き生きと描写した文章となっている。

■目次

1　最初のショック
2　ほんとに、にくらしい人
3　どちらがエッチか
4　日記事件
5　モーレツグループたん生
6　誠君って、まことにふしぎ
7　田中正造と誠君
8　がっくりときた日
9　考えこんでしまったこと
10　ライバル誠君とともに

■本文「8　がっくりときた日」（部分）

次の日は、二学期の級長選挙がありました。

（中略）

よくよくいやになってしまったのは、新しい席が決まったあとでした。

「これから、共同声明を発表してもらいます。ならんでいる者どうしで、二学期はこのように努力していくぞということを、日刊くろんぼ（学級新聞）の形式でまとめてみてください。」

と、先生が言ったのです。

「だれが、誠君なんかと……。」

いらいらしていますと、そんなわたしの心を見とおしたように先生が、

「この時間に終わらなかったら、帰りまでにしあげること。放課後、全員のものを黒板にはっておくからね。どのふたり組が意よくをもやしているか、あしたの朝はみんなで読み合ってみよう。」

と言いました。

わたしは、共同声明を書くことに、なんとも気のりがしませんでした。そんなわたしの気持ちも知らぬげに、

「亀田さんの二学期の努力点は、なに？」

誠君がたずねました。

「誠君は。」

聞き返してやりますと、

「ぼくは田中正造の研究だよ。」

とくいそうに言いました。売りことばに買いことばです。

「そんなら、わたしは、谷中村の調査をするわ。」

と言ってやりました。

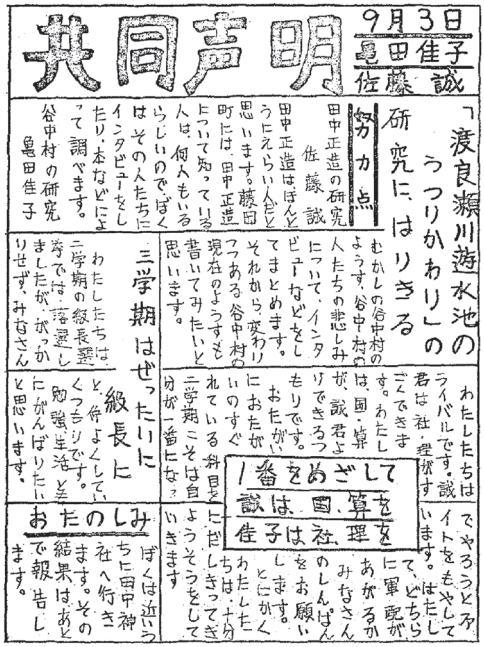
よそのふたり組は、はやくも声明文を書く相談をしています。わたしたちが相談もしないでもじもじしていると、先生がまわってきて、

「ここのふたり組は、書くことがたくさんあるんじゃないかな。勉強のことだったら、亀田さんは社会と理科を、誠君は国語と算数をそれぞれ相手以上にがんばるという、いい意味でのライバルになって、努力していくことを書いてみたらどうだろう。次は、ふたりとも〝落選はしたけれど〟という題で、何か書けるだろう。」

と、教えられました。

誠君は、わたしの方を見て、

「そうだ、そういうことを書こうか。」
と、わらいかけてきました。しかたなく、わたしも、
「そうね。」
と、こたえて書いたのが、上の共同声明です。


共同声明
9月3日
亀田佳子
佐藤誠
「渡良瀬川遊水池のうつりかわり」の研究に、はりきる
努力点
佐藤誠
田中正造の研究
田中正造はぼくたちにとってえらい人だと思います。藤田町には、田中正造について知っている人は、何人もいるらしいのでぼくはその人たちにインタビューをしたり、本などによって調べます。
谷中村の研究
亀田佳子
むかしの谷中村のようす、谷中村の人たちの悲しみについて、インタビューなどをしてまとめます。それから、変わりつつある谷中村の現在のようすも書いてみたいと思います。
わたしたちはライバルです。誠君は社、理佳君は社、理佳すいます。はたしてどちらに軍配がこんできます。わたしは、国、算が、誠君より、できろっもりです。おたがいにおたがいのすぐれている所をだしきってぎりぎりまでやろうと存じます。
1番をめざして
誠は、国、算を
佳子は社、理を
三学期はぜったいに級長に
わたしたちは二学期の級長選挙では、落選しましたが、がっかりせず、みなさんと仲よくしてくっきりです。勉強、生活、とにがんばりたいと思います。
三学期こそは自分が一番になっていきます。
あかるかみなさんのしんぱいをお願いします。
とにかくわたしたちは、十分ぼくは近いうちに田中神社へ行きます。その結果はあとで報告します。
おたのしみ

（2）「続、わたしのライバル―渡良瀬遊水池のうつりかわり―」

翌年に中央審査委員会推薦作品賞を受賞した「続、わたしのライバル―渡良瀬遊水池のうつりかわり―」[9]は、六年生になった亀田佳子をはじめとして学級全員三一名で渡良瀬遊水池のうつりかわりを調べ上げた経緯が、原稿用紙二〇〇枚を超える長大な作文としてまとめられたものである。前半は学級の取り組みぶりや調査の概要が、亀田佳子によって目に浮かぶように叙述され、後半は、二～四人の班で取り組んだ調査記録文となっている。

■目次

1　ぼくのライバル
2　やりがいのある仕事
3　あいかわらずの誠君
4　今泉さんへの手紙
5　ジョウハツした誠君
6　特ダネをつかんだカメラマン
7　ため息とスター
8　いたずらこぞうの変身
9　みとめられた誠君
10　負けてたまるか
11　ようやくまとめた調査記録

○七十年前の赤麻沼
○赤麻沼の伝説
○石川左門のこと
○さかなとりのさかんな赤麻沼
○スゲがさつくりもさかんだった
○公害の原点、死の渡良瀬川
○谷中村民の悲しみ

○うめ立てられた赤麻沼
○ヨシズ、マコモあみの歴史
○現在の渡良瀬遊水池
○研究調査記録を書きおえて
○おせわになったかたがた

12　田中正造になる誠君

■本文「2　やりがいのある仕事」（部分）

渡良瀬遊水池の位置を正確にいうと、栃木・群馬・埼玉・茨城の四つの県が接する所にあります。そのあたりは、百万分の一の関東地方の地図を開くと、このような記号（〓）（引用者注＝湿地を表す地図記号）で示されています。その地点が、渡良瀬遊水池とよばれている所なのです。面積三千三百ヘクタールといわれている遊水池は、堤防に立って見わたすと、前方がかすんで見えるほど広がっています。一面にヨシの生えしげった草原のまん中を、渡良瀬川が北から南へ帯のようにくねって流れています。この遊水池の南半分が、明治時代の終わりごろまで谷中村のあったところで、当時の政府や県を相手に、谷中村の人々をすくおうとして田中正造が活躍した所です。それから六十年たったいま、強制はかいを受けた谷中村は、そのおもかげさえしのぶことができなくなりました。代わりに、ヨシやスゲ、マコモが生え広がり、それらを材料として製品を作り生活している家が、赤麻にはたくさんあります。赤麻の人たちとは深い関係のある渡良瀬遊水池―それなのに、いつのころから、どのような経過をたどって現在をむかえるようになったのか、遊水池の歴史についてまとめた記録は、ほとんど残されていないのです。今ではもう、谷中村のようすについては、なかば伝説化されようとしているのです。

そこで、わたしたちは遊水池にかかわりのあるいろいろなことがらを、わたしたちの手でまとめてみようということにしたのです。記録としてまとめ、これを土地の人たちをはじめ、たくさんのひとに公開したとき、さらに各方面からいろいろな資料やアドバイスを得ることができると思うのです。それらを書き加えることによって、いっそう事実にせまり、より完全な記録として残しておきたいと思うのです。いま、このような仕事をやる者がなかったら、急速にうつり変わっていく遊水池のさまざまなすがたを、正しく後の世の人々に伝えることはできなくなると思うのです―こういう結論が、何度かにわたる学級会の席上で出たとき、わたしたちはやりがいのある仕事を見つけ出した喜びで、胸がいっぱいになりました。

研究をすすめていく上で、まず八つのグループが作られました。

○遊水池が作られる前の赤麻沼のようす
○赤麻沼に生まれた伝説
○赤麻沼の漁業
○すげがさづくり
○田中正造のこと

○谷中村の人々の生活
○ヨシズあみのこと
○マコモあみのこと

つぎに、グループごとに調べたことは、十日に一度は、画用紙に新聞の形式でまとめ、背面黒板にはり出すことによって発表にかえることになりました。

土曜の放課後、日曜日になると、各グループとも、学区内の目ぼしをつけた家をまわりました。おじいさん、おばあさんからむかしのようすを聞いてメモをとったり、実物を見せてもらってスケッチをしたりしました。

インタビューとなると、誠君はことのほかはりきりました。誠君と同じ「田中正造」のグループにはいっている関原君や山野井君はメモをもとに調査新聞を作りながら、

「とにかく、誠君はどこの家へ行ってもはずかしがらないからね。それに聞き方がうまいんだよな。つぎつぎと、話題をてんかいさせるんだから。」

と、話しあっているのを耳にしながら、

「わたしたちの谷中村グループだって、いまに特ダネをつかんで、誠君たちをあっといわせてやるから―。」

と、わたしはひそかに思いました。（後略）

## 五　成果を挙げた要因

このように平野は、ものごとを生き生きと描写できる力を育成することを基盤としながら、物語や詩の創作に取り組ませたり、調査研究を踏まえた報告・記録文に挑戦させたりすることによって、文章表現力を総合的に高めていった。平野がこうした成果をあげることのできた要因は、次の五点に整理できる。

①達成すべき技能目標を明確にした課題を、週ごとに与え、継続的に日記を書かせることによって、表現技能の向上・定着を図ったこと。

②新鮮な題材を取り入れ、書くことに興味・関心を持たせるとともに、立場の転換や文体の変化に挑戦させるなど、常に清新な気持ちで書くように導いたこと。

③学級文集や学級新聞などの発行によって、一人一人の作品が発表されたり紹介されたりする場を生み出し、達成感を味わわせるとともに、競い合いと学び合いを促していったこと。

④どの子も書ける詩の書き方（詩の構成モデルを活用する方法）や言語感覚を豊かにする指導方法を考案し、詩の創作指導を通じて、新鮮なものの見方や感じ方を獲得させていったこと。

⑤新聞活動によって、取材・選材の重要性や、表現方法・レイアウトに関心を持たせ、報告や記録の文体を身に付けさせていったこと。

なかでも、記録・報告文を中心とした長文叙述力の向上に大きな役割を果たしたのが、「新聞活動」である。平野は、学級で設定した一つの共通テーマを細分化し、分担して持続的な調査活動に取り組ませる過程で、「新聞活動」を生かし、取材力と表現力の両面を伸ばしていった。

## 六　新聞活動の二類型

平野が実践した新聞活動には、二つの類型がある。

一つは、新聞の表現様式を活用して、日記を書き続けることへの倦怠感を克服させるという、個々人の表現力の育成を目指したものである。

もう一つは、記録・報告文を書く学習を展開するに当たって、長期にわたる研究調査を持続させるとともに、調査の進行状況を知りあうことによって、学級全員による活動の推進を目指したものである。

### （1）表現様式の活用

日記は、作文指導において重要な位置を占めるものであるが、長期間続けていると、子供たちは、いつも同じような文体・型式で書き続けていくようになり、倦怠が生じ始めるものである。マンネリ化し、目的意識も相手意識もなく、漫然と記録していくのでは、日記指導はかえって逆効果となり、作文嫌いを生み出してしまうこととなる。

平野の場合も同様のことが生じ始めていた。そこで、平野は、様式を改め、「新聞型式による日記」に転換していくことにした。毎日ザラ紙半分（B5判1枚）の用紙に、四段又は五段組みで、「新聞日記」（図1）を書かせるのである。

とはいっても、最初から全てを任せると、書けない子が生まれてしまう。そこで、最初の三日間くらいは、取材指導に重点を置くことにする。

放課後に、その日の学校でのできごとの中から、「今日の特ダネは何か」と話し合い、取材の対象とすべき事柄を二つほど全員で決めさせる。その他の記事はそれぞれの自由とするが、このように特ダネの選択を共同作業で行うことによって、遅れている子にも取材の目の向けどころをはっきりさせてやることができるのである。

こうした導入期の指導を踏まえた上で、残りの作業は家庭に持ち帰って、新聞名の決定やトップ記事の配置にも工夫して書かせることにし、翌朝に全員に提出させる。

教室では、その中から、優秀作を十点ほど展示して、刺激し合う。そうすることによって、見出し文字の形や飾り罫を工夫したり、かこみ欄を作ったりするようになり、文字も丁寧になる。さらに、報道文の形式も取り入れるようになり、取材内容も幅広くなり、見るからに楽しさの満ちあふれたものとなっていくのである。

この「新聞日記」は、その後、手書きによる学級新聞「日刊くろんぼ」（図2）に発展し、当番制（並んでいる者二名によって取材・編集）で、卒業の日まで休みなく発行されていった。個々人の表現力の育成を目指した活動が、学級づくりの核としても機能するようになっていったのである。

さらに、この活動は翌年の子供たちにも引き継がれ、グループ新聞、学校新聞、児童会だより、委員会だより、地域の子ども会新聞、家庭新聞へと広がり、一九七〇年には、「全国学校・学級新聞コンクール」に入選、第一回酒井寅吉賞を受けるまでに育っていった。

日刊 あゆみ
No. 5
46. 5. 21
編集 小野信

三人やっぱりぬいたリレー
体育の時間にリレーをやった。ぼくらのグループはトップの広也君は、二番だったのにその子からぬかれてラストだった。ぼくの番が来。とき、むちゃうでかけた源一君をぬいて、清明君をぬいて、清子さんをぬいて、ぬいたりいい気持ち

これは音楽の時間
音楽の時間、小がいたので、ぼくはどきんとした。えをやると先生はいいえ、ぼくは、清子さんをぬいたのだ。五人もぬいたので、先生はいいというておこった。ぼくは、たった、勉強したんねん。

日刊 うき雲
46.5.21
No. 5
編集 大塚克江

まとまった日光遠足の記録
先週から書きはじめた日光遠足の作文が、きょう、ようやくできあがった。文はうまいと先生にほめられたしえもまあまあ。うまくかけたと思う。あすは、表紙をすこし考えてかけば、すばらしい遠足の記録になりそうだ。表紙は、けごんの滝、図書室で、赤小タイムズしを作るため、原紙を切った。カリカリと音をたてて、君江さんがじょうずに切っている。わたしもやってみたら、あんがいうまい字が書けた。おもしろくなって、いっぱい原紙を切った。

キャーットカゲだ！
体育の時間のとき、外へ出ようとしたら、うら庭から誠君がやってきた。「いいものを見せてやるよ」というので、行ってみると、何かを手をひらくと、青いトカゲがいた。びっくりして、わっとなった。だしたちはにげ出した。誠君は、みんがせっかくとってきたのを、「いいものを見せてやるよ」そうに持っていった。

新聞つくり
ほうか後、広報部の仕事をした。赤小タイムズしを作るため、原紙を切った。カリカリと音をたてて、君江さんがじょうずに切っている。わたしもやってみたら、あんがいうまい字が書けた。おもしろくなって、いっぱい原紙を切った。

まめニュース
☆ひる休みは、男も女も、みんなで中線ふみをやった。
☆かきとり大会もつは、きょうも勝った。
☆社会のテストは十五点で、大低だった。もっとがんばらなくちゃ。
☆家庭学習を二時間やった。あすもがんばろう。

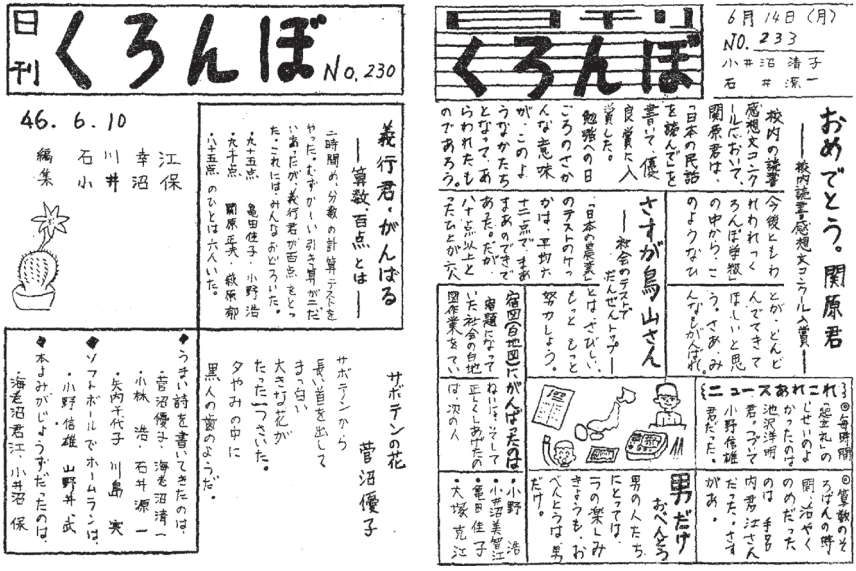
きのう、学校がよく書けたというので、詩を書いたら、これからどんどん詩を書いてはめられた。

ほめられた詩の手帳
詩の本をたくさん、読んでみたい。

おとうさん早くねてよ
ゆうべは、寒だいきょうは、ねすれたいけど、あすは、早くねてよ。

ありがとう千代子さん
弟があるのけがをしてねるよ。ぼくに、あすは、早くねてよ。千代子さんはしんぱいしたんだ。
ひるやすみに鉄ぼうの所にねずみがきたぼくのほうにきたぼくのほうにきてくれた。千代子さんはしんぱいしたんだ。

（図 1）新聞日記の事例（『新聞活動と学級づくり』p.27）



日刊 くろんぼ No. 230
46. 6. 10
編集 小沼幸 石川江保

義行君・がんばる
―算数、百点とは―
二時間め、分数の計算テストをやった。むずかしい引き算が二だいあったが、義行君が百点をとった。これには、みんなおどろいた。
九十五点　島田佳子・小野浩
九十点　関原正夫・萩原郁
八十五点　のひとは六人いた。

サボテンの花
菅沼優子
サボテンから
長い首を出して
まっ白い
大きな花が
たった一つさいた。
夕やみの中に
黒人の顔のようだ。

◆うまい詩を書いてきたのは、
・菅沼優子・海老沼清一
・小林　浩・石井源一
・矢内千代子・川島　実
◆ソフトボールでホームランは、
・小野信雄・山野井武
◆本まみがじょうずだったのは、
・海老沼君江・小井沼保

日刊 くろんぼ
6月14日（月）
NO. 233
小井沼清子
石井源一

おめでとう。関原君
―校内読書感想文コンクール入賞―
校内の読書感想文コンクールにおいて、関原君は、「日本の民話」を読んで、を書いて、優良賞に入賞した。勉強への日ごろのこのような意味が、このようなたちとなって、あらわれたものであろう。今後ともわれわれくろんぼ学級の中から、このようなひとが、どんどんでてきてほしいと思う。さあみんながんばれ。

さすが鳥山さん
―社会のテストだんぜんトップ―
「日本の農業」とは、ざひょうのテストのけっかは、平均が十二点でまあまあのできであった。だがいくぶん上とうたひとが六人。とくしてあげたい。もっと、とことん努力しよう。

宿題百点にがんばったは
宿題になっていた社会の白地図作業をていねいに、そしてしてあげたのは、沼の人

{ニュースあれこれ}
◎毎時間「感れこれ」のじせいのよかったのは池沢洋明君つゞマ小野信雄君だった。
◎算数のそろばんの時間、沼やくのめだったのは、手ぶ内君江さんたった。さすがあ。

男だけおべんとう
男の人たちにとってはうの楽しみきょうも、おべんとうは男だけ。

・小野　浩
・小井沼美智江
・亀田佳子
・大塚克江

（図 2）学級新聞「日刊くろんぼ」の事例（『新聞活動と学級づくり』p.28）

## （2）学級全員による研究調査新聞作り

平野学級の新聞づくりは、相互理解を促進することにとどまらず、国語や社会や理科などを総合した調査研究活動につながっていく。

研究調査新聞の典型的な事例は、学級（五年生）が全員で取り組んだ調査研究「渡良瀬川のうつりかわり」に見ることができる。

一九七一年九月、ＮＨＫの番組を視聴したことなどが契機となって、赤麻地区の南隣にかつて存在した谷中（やなか）村の歴史などを、学級全員の課題として調べてみることになった。「田中正造」「谷中村」「赤麻沼」「赤麻沼の伝説」「魚取りのうつりかわり」「スゲがさづくり」「ヨシズあみ」「マコモあみ」など八項目について、三十一名全員で手分けして活動を進めていくのである。

土曜日の午後になると、カセットテープレコーダーを持って、グループごとに調査に出かけ、古老から昔話を取材したり、旧谷中村民の子孫を訪ねていったりする。谷中村民の移住先（北海道）まで問い合わせの手紙を書いたりする子も出てくるなど、意欲的に活動が進められる。

だが、グループのノートに記録文の形でまとめるだけでは、それぞれの調査内容が共有されない。そこで考案されたのが、研究調査新聞（図3）である。十日に一度の割合で、四つ切りの画用紙に手書きによる新聞の形でまとめさせると、他のグループの取材内容が一目で分かる。さらに、一人でも多くの人に読んでもらおうとして、見出しに工夫をしたり、図・絵・写真などを挿入したり、レイアウトにも気を配るようになってくる。

（図3）研究調査新聞（『新聞活動と学級づくり』）

ところが、新聞製作は、時間がかかる（五～六時間必要）という難点を持っている。また、こうした活動に熱中できず、傍観的な立場になってしまう子も生まれてきてしまう。

そこで、グループ全員の力の結集と作成時間の短縮をねらって、「切り貼り方式による新聞づくり」に改めていく。画用紙にリーダーが割り付けをして、その割り付けにあわせて色模造紙を切り取り、それぞれが分担するのである。こうすれば、各自が責任を果たすという自覚が生まれてくる。

こうして各グループが二〇号ほど発行したところで、調査活動は終了し、この新聞をもとにグループごとに記録文にし、一〇〇ページほどの文集として発行していった。

この研究調査新聞づくりを通して、学級全員の連帯感が深まったのはもちろんであるが、このときに養った表現技能は、六年生になって多方面に活用されることとなった。また、他学級をも動かし、全校あげて新聞活動が盛んになっていった。

## 七　平野の新聞活動の特徴と意義

こうした新聞活動は、作文指導の原理と合致したものであると言える。

第一、「場」の設定。新聞という形式を取ることによって、誰かに読んでもらいたいという意欲を喚起することができる。また、読んでもらえる文章、伝わる文章を書こうという意欲を高めることができる。

第二、「文体」の多様さ。生活文にとどまらず、記事文、記録・報告、意見や主張、詩・短歌・俳句、物語、鉛筆対談、広告、イラストや図表や写真など、目的に応じた文体が選ばれ、必要性を実感しながら書くように導いていくことができる。

第三、「取材」と「選材」。限られた紙面に収めなければならないという制約や、記事に順位をつけねばならないという編集上の条件が、取材力や選材力を向上させることにつながっていく。

第四、「見出し」や「配置」に対する工夫。効果的な見出しを考えることが要点をまとめる力の向上につながる。また、文章構成力や編集力の向上につながってくる。

第五、「推敲」意識の向上。単に誤字脱字の点検だけでなく、読み手に伝わるかどうかを常に意識していくことにつながる。

第六、「交流」の場。新聞を掲示することでお互いを知りあい、また刺激し合うことになる。これによって、学級全体の学力が向上していく。

第七、「共同作業」の可能性。これは、新聞特有の指導効果として挙げることができるものである。新聞は、一人で作るものではなく、様々な記事を分担し、編集して作り上げていくものである。この性質を活用することで、一人一人に責任を持たせることができる。どの子も参加でき、全員で達成感を味わうことができるのである。

平野は、新聞のこうした特質を存分に活用していたと言える。

平野が活躍していた時代にはまだ、メディアリテラシーの視点から新聞を分析するという発想はなかった。だが、作文指導の本質を見失うことなく、新聞という表現様式を生かしていた点において、特筆すべき実践であった。

**注**

1 拙論としては、「平野彧の作文指導の特色と意義―日記指導を中心に―」（『中西一弘先生傘寿記念論集』大阪国語教育研究会、二〇一二）、「平野彧の詩創作指導の特色と意義―児童詩創作指導のカリキュラム化―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部』第六二号、二〇一三）、「年間を貫く帯単元・帯学習―実績あげた実践者に聞く／表現技能の習得・活用をねらった計画的な日記指導―平野彧の場合―」『教育科学国語教育』二〇一四年三

月号、明治図書）がある。本稿によって、平野の作文指導の四つの特色、即ち「日記指導」「新題材の開発」「詩創作指導」「新聞活動」を網羅したことになる。なお、先行研究としては、平野の「新題材の開発」について論評した高森邦明（一九八四）、大内善一（一九九六）が見られる。

2 学級文集「青い風」は、『学級文集の研究』第一三巻（大空社、一九九三）に収載されている。本書の解説を執筆した太田昭臣は、当時の受賞理由が「大変ジャーナリスティックな編集で、文章もしっかりしている。最後にひとりひとりの子の特徴を書いてやったり、先生のことを知らしたりして、親しみやすい、きれいな文集」（『作文と教育』一九五九年六月号）であったことを紹介し、二五〇〇冊あまりの応募の中から「入選」三〇点に選ばれるのは「至難の業」であったと評している。

3 この学級文集は、これ以降一六年間にわたって発行された。なお、「くろんぼ」という名称は、「四五人のなかまたちが、学習に、また、よい生活をつくりだすために、みんなで心を一つにし、努力のあせをどんどん流そう。まっくろになって、よい学級をつくるためにがんばろう。」（『くろんぼ』No.14「はじめに」一九六一年六月）という願いを込めてつけられたものである。民族差別を助長する恐れのある用語であり使用を控えるべきであるが、歴史的資料名であるからそのまま掲載することとする。

4 日記指導の年間指導計画表（第五学年）は、平野彧『作文指導と学級づくり』（明治図書、一九七二）に収載されている。

5 平野彧『新題材による作文指導』明治図書、一九七七

6 平野彧『どの子も書ける詩の指導』東洋館出版、一九九〇

7 平野彧『作文指導と学級づくり』明治図書、一九七二

8 平野彧『新聞活動と学級づくり』明治図書、一九七五、41～68頁

9 注8に同じ。96～174頁

## 参考文献


大内善一『作文授業づくりの到達点と課題』東京書籍、一九九六

高森邦明『作文教育論2・言語生活的作文の指導』文化書房博文社、一九八四

日本作文の会編『学級文集の研究―生活綴方と教育実践―』大空社、一九九三

日本作文の会編『戦前戦後日本の学級文集』第一三巻、大空社、一九九四

平野彧『作文指導と学級づくり―作文日本一が生まれるまで』明治図書、一九七二

平野彧『くろんぼ学級物語』明治図書、一九七四

平野彧『新聞活動と学級づくり―続・くろんぼ学級物語』明治図書、一九七五

平野彧『新しい日記指導』明治図書、一九七六

平野彧『新題材による作文指導』明治図書、一九七七

平野彧編著『創意を生かした作文の授業』明治図書、一九七七

平野彧『作文指導の創造と発展』明治図書、一九七八

平野彧『作文指導の実践入門』明治図書、一九八〇

平野彧『どの子も書ける詩の指導』東洋館出版社、一九九〇

松平信久編『日本の教師4・学級文化の創造』ぎょうせい、一九九五

（広島大学）